

お通夜・葬儀の途中で、法要の導師が、「カチ、カチ」と音を鳴らしながら、御唱え事を致します。

その時、導師が手に持っているものは四角い小さな拍子木の形をした「戒尺」と呼ばれる仏具です。「戒尺」は、主に黒檀、紫檀など硬い木を用いて作られており、高く鋭い音が、会場に響き渡ります。

「戒尺」は、字で表すと、戒律の「戒」に、長さの単位の「尺」の字で「戒尺」と書きます。

お通夜・葬儀においては、戒を受ける側としての導師と、戒を受ける側としての新たに仏門を志す亡き人との間に授戒の儀式が執り行われます。導師は、戒を受ける場面で「戒尺」を鳴らし、はじめに身体と言葉とことろについて、私たちの行いを振り返りその身を浄めるよう導きます。

仏様の戒を受ける授戒の儀式で時折入る「戒尺」の音は、会場に響くだけではなく心に響きその音を通して、手を合わせている私たちの心の奥底に染み入るように感じます。このように、仏様の戒は言葉の受け渡しを通して、これからの仏の道への指針として、亡き人や私たちの胸に刻まれるのです。

お通夜・葬儀は、亡き人が、新たに仏様として旅立つ荘厳なる式典です。近親の方として、また会葬者として、参列される機会を持たれる方は、私たちの心に響く「戒尺」の音に耳を傾けていただき、ともに身を浄め、仏の道に入る亡き人の旅立ちを見守っていきたいものです。

— 終 —